

シュービナ、オリガ・アリクシエヴナ

アホーツカヤ3集落跡のかまど付き住居群（2020年の発掘資料による）

『サハリン博物館報』2021年3号 サハリン州立郷土誌博物館 55-93 ページ

Шубина, Ольга Алексеевна. Жилища с печами на поселении Охотское 3 (по материалам раскопок 2020 года).

Вестник Сахалинского музея, 2021, No.3. Южно-Сахалинск: Сахалинский областной краеведческий музей, 2021. сс. 55-93.

第2部：2号住居の記載から末尾まで

2号住居跡は1号住居にじかに接する位置にあり、1号の南東側に接続していると言ってもよい（図15）。住居の掘方の範囲の地表は20本以上の樹木の根が食い込んでおり、発掘区外との境にまたがって伸びていた。

堅穴の掘方は隅の丸みの強い方形または五角形の緩やかな窪みを形成しており、径は6~7m、深さは最大0.4mである。文化層の掘り下げの過程では動きやすく脆い砂質の土壌構造のために堅穴の壁はごく不明瞭にしか検出できず、上下に清掃する場合にのみ、比較的薄い（6~10cm）古代の地表面の明灰色のボドゾル状砂質土の存在によって辛うじて確認された。この砂質土は新石器の層であり、堅穴はそれを切って地山に掘り込まれている。

新石器の層は住居の掘方のほぼ全周に認められ、その厚さは6~10cmの範囲で変化がある。堅穴の覆土は不均一な茶色がかった黄色の砂質土または砂で、厚さは中央で0.15~0.2m、壁面付近では0.3~0.35mである。堅穴の壁は新石器の層を切って地山に0.15~0.2m食い込んでいる。清掃の際には住居の壁直下のほぼ全周にやや腐植土化した砂質土が続くのが確認されたが、これは焼けている部分も多く細かい炭片を含んでいるので、火事の跡であるかも知れない。

堅穴の南側ではほとんど腐植土の直下から始まって、層を追って掘り下げていくにつれある構造物が出現した。その構成は、肩の上部では黄色味を帯びた灰色の粘土のレンズ、壁の斜面では赤っぽい色の焼けた粘土の集



図15 発掘着手前のアホーツカヤ3集落跡1号（白色の輪郭線で示す）と2号（青色の輪郭線で示す）住居跡。伐採した木の切り株と、1号住居跡には狐の巣から掻き出された土がよく見える。北西側から俯瞰。И.Г.マルコフ撮影



図 16 2号住居南側の方に作りつけた粘土造りのかまどの跡。北西から見る。O.A.シュービナ撮影

塊、そして構造の基部には多数の炭片を含む火床の変色部分があるというものであった（図 16）。かつてアホーツカヤ3遺跡で発見された構造物（文献3、184~188 ページ）との類推によって、これは粘土造りのかまどであると解釈された。

かまどは住居の掘方の南側の壁に作られており、その構造は基底の部分、つまり住居の掘方の中にあつて住居の壁に隙間なくとりついている焚口・天井の部分と、住居の肩を掘り抜いて竪穴外で古代の地表面に開口する煙道とから成っていた。かまどの焚口は北側にあり、全長は1.3mである。焚口は幅0.75~0.8m、長さ約0.8mの大きさである。かまどの天井部分は球形をしていて植物質の素材から成る骨組みに粘土を塗り付けたものであり、その基部は焚口の両側で地面に固定されていた。このことは塗り付けた粘土の小さな破片に植物繊維の痕跡があることによって裏付けられる。粘土でできたかまどの壁面の厚さは約10cmであった。火の作用により天井構造の下部（内側）は焼き固められまるで土器のように硬化していた。かまどに塗った粘土の小破片は焚口付近にも、0.25mであった。天井構造の下部は地山の鮮黄色の砂の中に半円形を描く明色の粘土の帯としてよく見てとることができる（図 17）。天井構造の内部は炭片を多数含む黒褐色かほぼ黒色の砂が堆積している。煙道は住居の範囲の外に延びており、そこで煙道を覆う径0.5m、厚さ約10cmの粘土のレンズが確認された。構造の中央部を平面的に掘り下げていくと「掛け口」の痕跡と思われるものが現れた。これは竈の天井にあけた穴で、食物を調理する器を据えるために使ったものと思われる。この穴は径約20cmの変色部分として確認され、この開口を縁取るかのように細かい粘土の破片を伴っていた。また住居の床面にも認められた。住居の屋根と土の荷重によりか



図 17 2号住居の粘土造りのかまどを清掃し横断方向の地層断面を設定した状況。東及び北から見る。O.A.シュービナ撮影

まどの天井は崩壊して、横断面での高さは約0.25mであった。天井構造の下部は地山の鮮黄色の砂の中に半円形を描く明色の粘土の帯としてよく見てとることができる（図 17）。天井構造の内部は炭片を多数含む黒褐色かほぼ黒色の砂が堆積している。煙道は住居の範囲の外に延びており、そこで煙道を覆う径0.5m、厚さ約10cmの粘土のレンズが確認された。構造の中央部を平面的に掘り下げていくと「掛け口」の痕跡と思われるものが現れた。



図 18 2号住居跡の完掘状況。北西から見る。O.A.シュービナ撮影

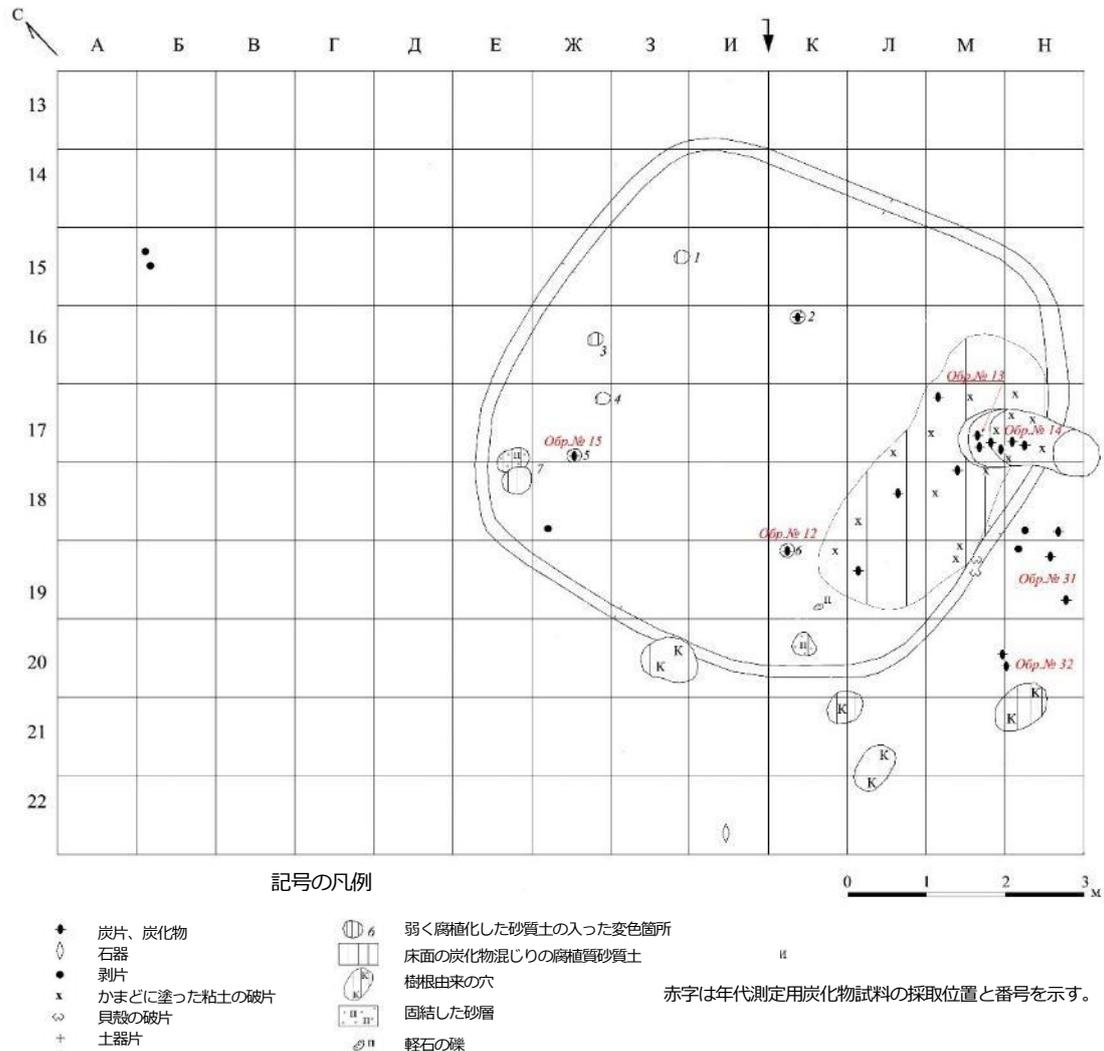


図 19 2号住居の地山面における完掘平面図。アホーツカヤ3集落跡。O.A.シュービーナ作成

これは竈の天井にあけた穴で、食物を調理する器を据えるために使ったものと思われる。この穴は径約 20cm の変色部分として確認され、この開口を縁取るかのように細かい粘土の破片を伴っていた。

床面を示す薄い層は地山より少し暗色の、黄色味を帯びた灰色を呈し厚さは 3~4cm で、主に粘土造りのかまどに近い住居の南側を中心に検出された。床面の清掃に際して所々に炭片、かまどを塗った粘土の小さな破片、軽石のかげらが現れた。地山面まで清掃した時点で焼け焦げた茶色の砂質土または砂の入った変色部分が 6 つ認められ、中には炭片を含んでいるものもあった。これらはみな小さな円形で径 12~15cm、深さ 10cm 未満である。この変色部分の一つでは大粒 (2.5~3cm) の炭化した木材の破片が発見された。住居に住んだ人間の生活に関係する人工遺物は発見されなかった。

住居の掘方の形状を判定することは困難である。一応は五角形だったように思われ、径 6 から 6.5m、深さは 0.2~0.35m であった (図 18・19)。

3号住居跡は1号住居から東へ3mのところを位置し、南西側には4号住居の掘方がほとんど接触した状態である (図 20)。堅穴周辺の地表は 8 本の木、主にはハイマツの根系が食い込んでいた。堅穴は見かけ上円形を呈し、断面は「皿状」、つまりごく浅く不明瞭な落ち込みで肩も崩れており、径約 7m、深さが 0.25~0.3m であった。

堅穴の壁はごく不明瞭にしか検出できず、地山の砂層との差はほとんどわからなかった。南側では比較的薄い (4~8cm) 古代の地表面を示す明灰色のポドゾル状砂質土、つまり堅穴が切り込む新石器の層の存在によって壁



図20 発掘着手前のアホーツカヤ3集落跡3号・4号住居跡。北西側から俯瞰。И.Г.マルコフ撮影

を捉えることが可能であるが、北東側では新石器層は顕在的でなく、灰色のポドゾル層という肩の指標が存在しないために、竪穴東側の壁はところどころ検出できずに過ぎない。

竪穴の南側では腐植層のほとんど直下から始まって、その後の平面的な掘り下げを通じて上記の2号住居のもの同一の構造が出現した。かまどは住居掘方の南東側の壁に作りつけられ、粘土の天井部に覆われ住居の掘方内にある焚口と、肩を切り込んで竪穴の外側で古代の地表面に出ている煙道とから成り、煙道の孔は粘土のレンズで覆われている。かまどは焚口を北向きにして長さ1.5mを測る(図21)。焚口はほぼ全体が粘土で築いた天井部の下にある。焚口の規模は幅0.4-0.5m、長さ約0.5-0.7mで、その下には径0.4mの焼けて赤くなった砂の薄い(2-3cm)レンズが検出された。現状で天井部の高さは約0.25mである。焚口は境目なく煙道へと続き、両者は植物質の素材に粘土を塗りこめて作った土製の天井構造の下で繋がっていて(粘土の上塗りの細かい破片が残っており、その中には植物繊維の圧痕を持つものがあった)、その骨組みは球形のものだった。かまどの壁の粘土の厚さは5-6cmあり、最大10cmに達した。赤く焼けた粘土を指標にすると天井構造の全長は0.8-0.9m、幅は0.4-0.5mである。天井構造の覆土は黒褐色からほぼ黒色の砂で、炭片を多数含んでいる。注意を引いたのはかまどの屋内側に径4-5cmある大粒の炭化材が残っていたことで、これは住居の床面にある焚口の火床のレンズの中に見られる炭片の多くが微細であるのとは異なる。天井部中央の垂直断面では「掛け口」に当たる位置の窪みに焼けた粘土が入り込んでいるのが認められる(図22)。

煙道は住居の外側へ伸びており径0.4-0.5m、厚さ最大0.2mの粘土のレンズで覆われていた。このレンズを水平に切り取って行くと煙道の孔がはっきりと検出され、そこに意図的に粘土が詰め込まれていた。このレンズ下部の厚さは7-8cmで黄灰色の生の粘土であり、径約16cmある煙道の外部開口の輪郭を示し、煙道の中には不均質な、土や細かい炭片、焼けた粘土の断片(煙道の内側に塗ったものか)が混じった粘土が詰まっていた。粘土のレンズの垂直断面では煙道掘方の屋内側に人為的に粘土を詰めている状況がはっきりと見られた。

床面の清掃に際してかまどの付近では細かい炭片とかまどに塗った粘土の小さな破片が認められた。かまどの傍らと竪穴の南東部では、主に住居の肩の足元の部分に薄い(1.5-2cm)床面を示す層が確認された。これは黄色



図 21 3号住居における粘土造りのかまどの外観。北から見る。O.A.シュービナ撮影

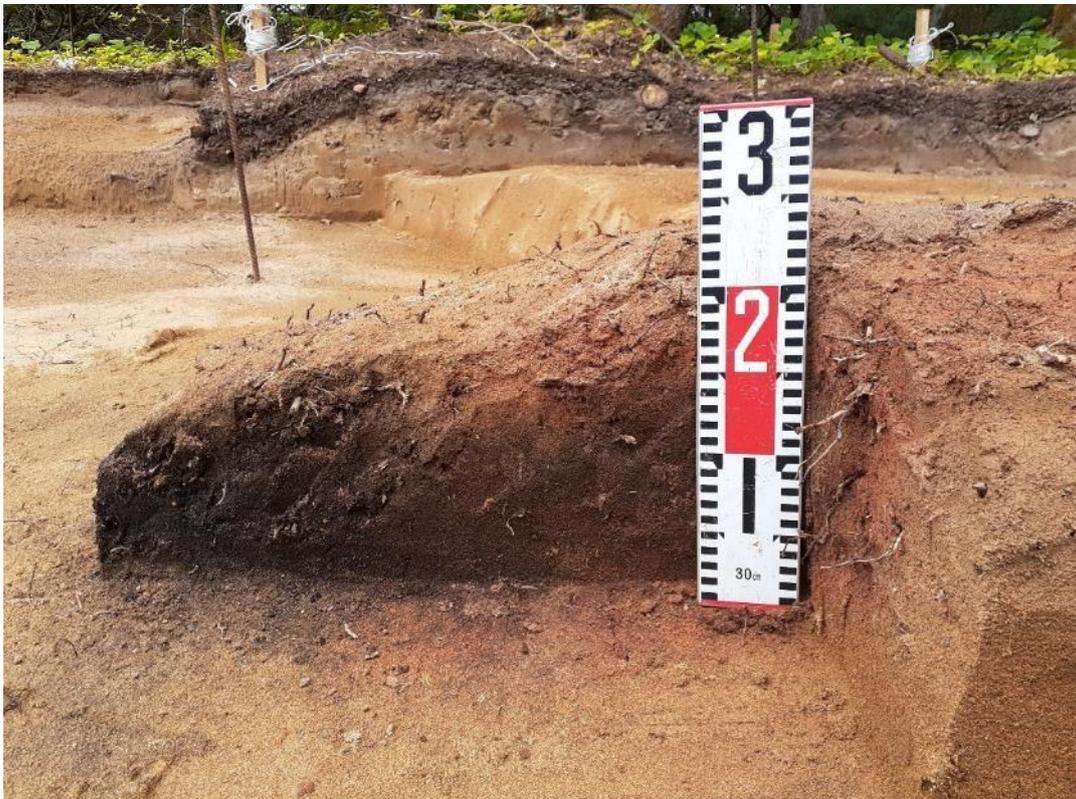


図 22 3号住居における粘土造りのかまどの焚口の縦断面。西から見る。O.A.シュービナ撮影

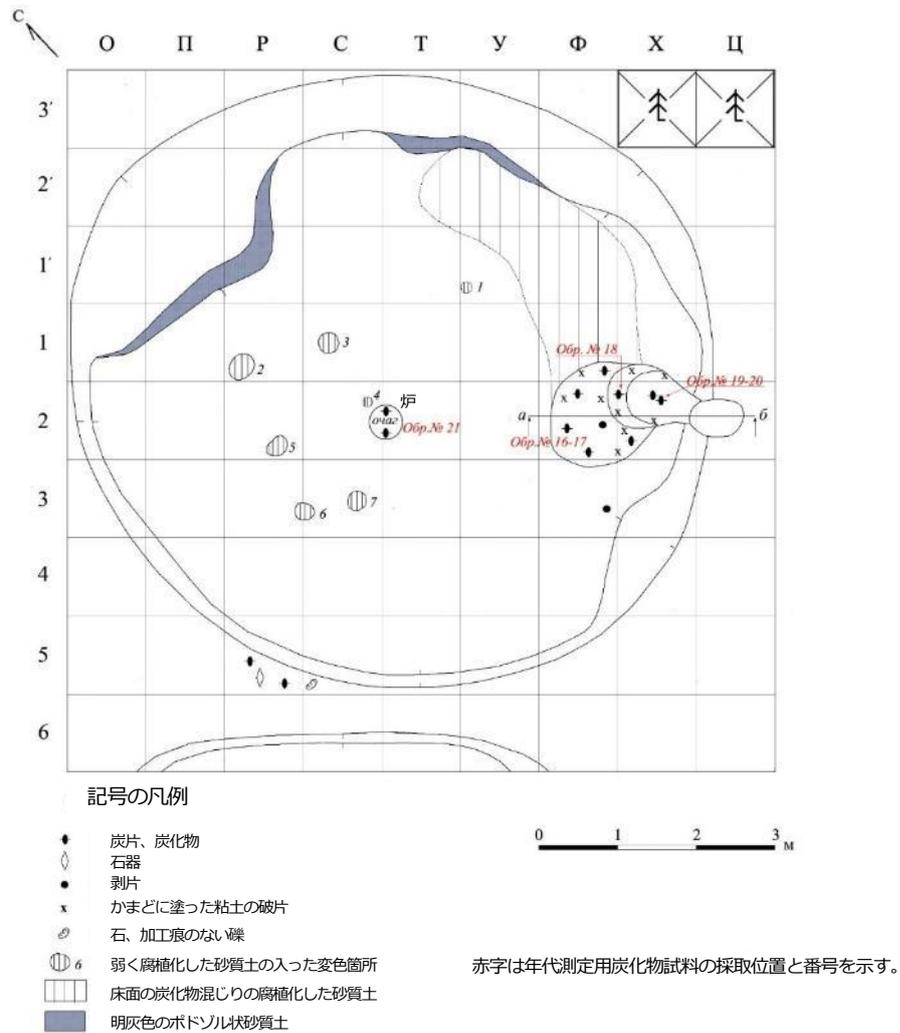


図 23 3号住居の地山面における元掘平面図。ノホーツカヤ3集落跡。O.A.シューピナ作成

味を帯びた褐色の、腐植化した砂質土で炭化物が含まれる。床面でもまた堅穴覆土からも人工遺物は一切発見されていない。

住居の中央部の、粘土造りのかまどから北へ約 3m、堅穴の壁からは 3~3.5m の距離のところには炉が位置する。住居の床面（現地表面から 0.18~0.22m の深さにある）で薄く（2~3cm）、径 0.4~0.45m の円形の、褐色を帯び焼け焦げた砂質土ないし砂のレンズ状堆積が検出され、その下位は深さ 5cm のところまで砂が焼けて赤くなっていた。見たところ炉の囲いの存在を示すものはない。焼土のレンズの傍らでは不明瞭ながら径約 12cm で細かい炭化物を含む小さな変色部分が認められ、これ以外にもさらに 5 か所、径 0.2~0.25m の変色（恐らくは柱穴の痕）が検出され、地山と多少異なって暗色の、褐色を帯びた黄色を呈していた。これらがやや歪んだ Π 字状または略方形の構図を描いておりその規模は 1×2m である（図 23）。この変色部分を精査して住居の構造を示す主柱と思われるものの深さを確かめようとしたが思うようにいかず、覆土はすぐに底をついて下は色も構成も地山と変わる所のない砂となる。

3号住居の掘方の形状を明言することは難しい。恐らくはほぼ円形、または隅の丸みの強い方形か五角形であり、堅穴規模は径およそ 7.5~8m、壁際での深さは最大 0.3m である（図 24）。

4号住居跡は1号及び3号住居のすぐそばに位置し、それぞれの東及び南側にほとんど接続した状態である（図 3・20）。住居の掘方がある付近の地表は樹木の根系で荒らされ、不定形な土の盛り上がりがある状況だ



図 24 (上) 3号住居跡の完掘状況。北西から見る。O.A.シューピナ撮影

図 25 (右) 4号住居における粘土造りのかまどの外観。北から見る。O.A.シューピナ撮影



が、見たところ現代の攪乱を受けた形跡は認められない。

竪穴は外見上隅の丸い方形を呈し、肩の線のはっきりした「たらい状」の断面を示し、規模はおよそ5.5×5.5m、深さは0.4~0.45mに達する。四隅はそれぞれ東西南北を向いている。住居の壁はその全周にわたって厚さ4~6cmの新石器層を切り込んでいる。



図 26 4号住居における粘土造りのかまどの縦断面。南西から見る。O.A.シュービナ撮影



図 27 4号住居における粘土造りのかまどの縦断面に炭混じりの落ち込みとして現れた「掛け口」の痕跡。

O.A.シュービナ撮影



図 28 地山面まで完掘した4号住居跡の全景。西から見る。O.A.シューピナ撮影

堅穴の南側ではほとんど腐植の直下から始まって、層ごとに掘り下げるにつれて構造物が出現した。これは住居の掘方の外にある径 0.35~0.4m の灰色の粘土のレンズと、堅穴の肩の斜面上部にあつて幅約 0.6m、長さ約 0.8m で厚さ 6~8cm の帯黄灰色の粘土のレンズ、及び赤みを帯びた焼けた粘土が幅 0.6~1.1m、長さ 0.7m にわたって住居の掘方内にあるもの、さらに構造の基底を占める炭片多数を含んだ黒褐色の焼け焦げた砂質土の溜まった部分、という構成をもつ (図 25)。2・3号住居の掘方に伴う構造との類比からこれも粘土造りのかまどと解される。

4号住居の粘土造りのかまどはすでに述べた2・3号住居のものと同じ作りである。かまどは住居の掘方の南東の壁に作りつけたもので焚口が北西を向き、煙道の出口は粘土のレンズで覆われている。構造の全長は約 1.6m である。覆いのない炉のような形状を持つ焚口の大きさは幅 0.5~0.6m、長さ約 0.8~0.9m である。かまどの天井は植物質のもので作って粘土を塗っており、その骨組みは球形を呈する。かまどの壁の粘土は厚さ 8~10cm あり、外側の生の粘土の層と内側の焼けて赤みを帯びた粘土の層から成る。かまどに塗った粘土の細かい破片も残っていた。天井部分は壊れているが高さ 0.2~0.22m あり、その内部は黒褐色からほとんど黒色の、多数の炭片を含む砂が詰まっている。このかまどの特徴は、2号住居のものと同様天井部分に「掛け口」があることである。これは径約 10cm の焼け焦げた炭混じりの砂質土の落ち込みとして検出され、赤っぽく焼けた粘土の天井部の端から 0.4m のところにこの落ち込みの縁を輪状に盛り上げて粘土が塗られていた (図 26・27)。煙道は長さ 0.4~0.5m、幅約 0.4m で住居の外に突き出ており、そこに径 0.35m、厚さ約 0.1m の灰色の粘土のレンズが確認された。住居の掘方外側の古代の地表面ではもう一つ同様の生の粘土のレンズが検出されたが、これは粘土造りのかまどの構築や修理のために用意した素材 (かその残余) であるかも知れない。

堅穴の覆土は褐色がかった黄色の不均質な砂質土または砂で、厚さは中央で 0.2~0.25m、肩の近くでは 0.35~0.4m に達する。堅穴の壁は新石器の層を切って平均して 0.2~0.3m 地山に掘り込まれている。清掃に際して床面を示す薄い層が認められたが、これは厚さ 4~6cm 以下の腐植混じりの砂あるいは砂質土で、炭化物とかまどに塗った粘



図 29 4号住居の掘方床面の配石。南から見る。O.A.シュービナ撮影

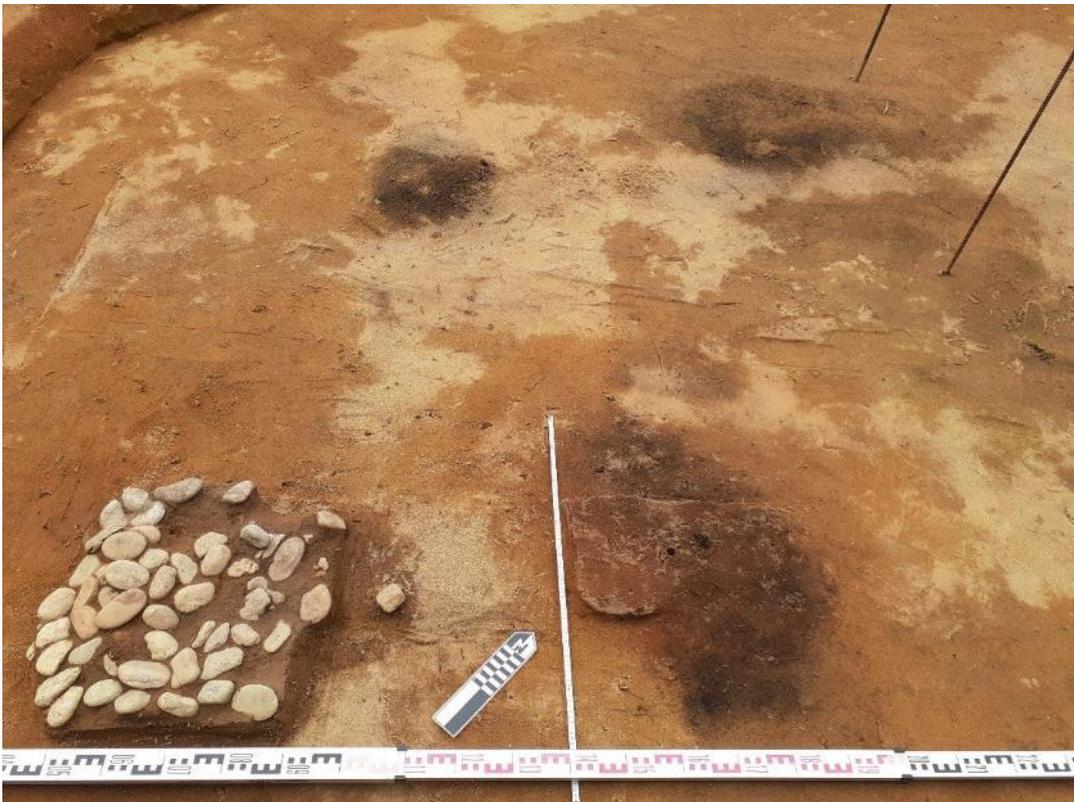


図 30 4号住居の掘方床面の配石、火床のレンズ及び暗色の覆土を持つ変色部分。南東から見る。O.A.シュービナ撮影



図 31 4号住居掘方床面の方形の変色部（レンズ）に暗色の覆土と炭片が伴う。南東から見る。O.A.シュービナ撮影

土の細かい破片を含んでいる。この薄い層はかまどの付近と住居の南側ではよく確認できるが、一方竪穴の北部では床面は実質的に全くそれとわからない状態である。

住居の中央部では床面（現地表面から 0.3~0.35m の深さ）に炉、配石及びいくつかの変色部分が発見された（図 28）。

住居の北西部では炉からおおよそ 0.5m と 1m の距離のところに変色した部分が 2 つ発見された。詳しく言うと黒褐色の、細かい炭片を含む腐植化した砂質土の溜まった箇所である。どちらもほぼ円形で、径は 0.35~0.4m と 0.5~0.55m、厚さは 9~10cm である。炉から北東へ 1.5m のところには略方形で大きさ 0.25×0.35m、厚さ 10cm のレンズが認められた（図 31）。これらのレンズ状堆積は互いに 1.1 及び 1.3m 離れて半円を描くように位置している。これらは輪郭が非常にしっかりしていて、覆いのない炉として用いられたのではないと思われる。もしかするとこれは有機質（木材、蔓または樹皮）の容器の痕跡であり、内面を粘土で塗ったうえ木炭を入れてその場を温める火鉢のようなもの、または炭火で調理をする（肉や魚を焼くなど）ためのものであるかも知れない³⁾。

住居の掘方の南東側の壁に食い込んで、粘土造りのかまどの側の床から 0.1m の高さのところに大きな炭の破片ないし炭化した木材が発見されたが、これは砂質の竪穴の壁に差し込まれた木の棹あるいは細い丸太の痕跡であるかも知れない。

住居に住んだ人間が遺した人工遺物は全くない。住居の掘方西側の壁付近では床面に、配石のものに似た小さな円礫が一つ発見され、竪穴外の現地表面から 0.18~0.2m の深さのところでは灰色ポドゾル状の新石器層の砂質土の上面で小型の（15×8 及び 10×6cm）円礫が 2 個発見された。これらは加工その他の人為の痕跡はないが明らかに意図的に持ち込まれたもので、すでに述べた住居床面の配石の石とよく似たものである。

4号住居の掘方の形状はそれ以外の 3 基とは違って十分明確に断言できる。つまり住居は略方形で、その四隅は東西南北を向き、竪穴の大きさはおよそ 5.5×6m、深さ最大 0.5m である（図 32）。住民の生活に関する出

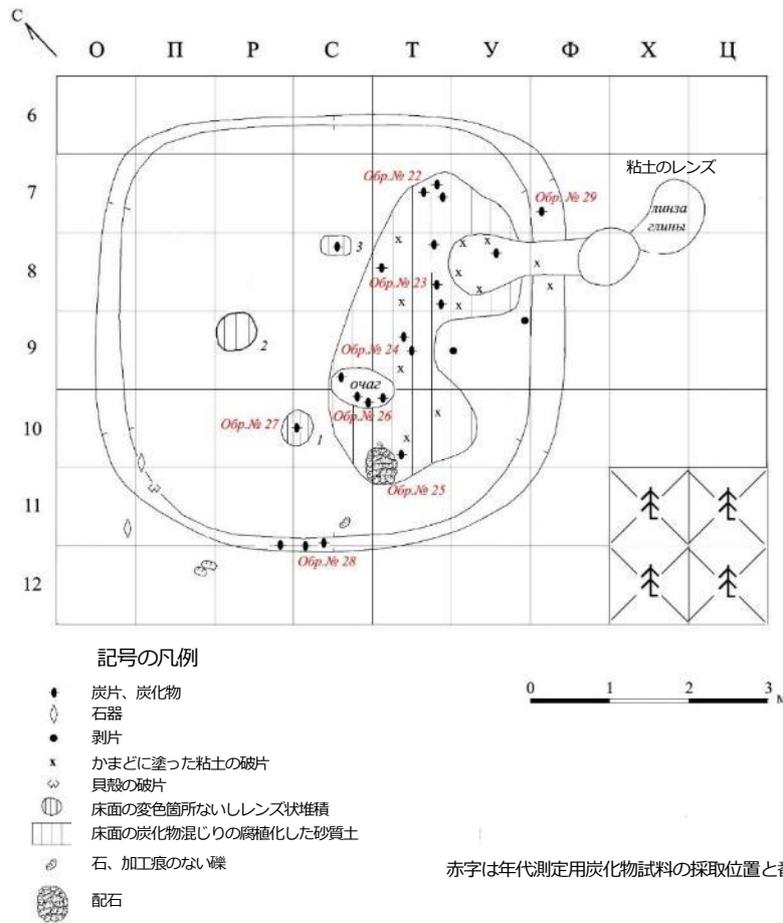


図32 4号住居の地山面における完掘平面図。アホーツカヤ3集落跡。O.A.シュビーナ作成

土品はないが、この住居は隣接する1~3号住居よりも長期間居住されたものという印象を与える。

以上の住居はどれもより古い文化層を掘り込んでいるので、堅穴の覆土や住居の間の空間には往々新石器の特徴を持つ出土品が見られた。小さいうろこのような珪質頁岩、玉髄、玄武岩及び黒曜石製の剥片、三角形や菱形の石鏃、薄手の土器片、貝殻の破片などである。新石器時代の居住や生業のための施設は発掘区の範囲では見られなかった。

最後に、今回調査したアホーツカヤ3集落跡の住居群の特徴を次のとおりまとめておきたい。

4基の住居の全体はまとまりの強い一群をなしており、現地表面から不定形(1~3号堅穴)及び略方形(4号堅穴)の輪郭を持つ落ち込みとして認められ、径6.5~8.5m、深さは最大0.7mである。発掘の過程で明らかになったのは、1号・2号住居はどうやら五角形、3号は円形か五角形であり、4号住居は方形であるということである。どの住居でも出口の構造を検出することはできなかった。床ははっきりせず、黒褐色の、腐植を帯びた炭片混じりの薄い砂または砂質土の層として断片的に、つまりかまどの周辺と堅穴中央部で限定的に検出できたに過ぎない。住居内部の構造をうかがわせるものはほとんど残っていなかったが、恐らく流動しやすい砂質の土壌であるためかも知れない。住居の床面にはしばしば地山層の中に変色部分が認められ、中に地山より暗色の不均質な砂に炭片が混じったものが堆積していたが、深さを確認することは砂質土上の特性上非常に困難である。精査できた穴の深さは10cmを超えない。どの住居でも居住した人間の生活に関する出土品は完全に欠如しており、1号住居で青色のガラス玉が1点出土したのみである。

暖房その他の生活上の需要に応えるため調査したどの住居でもかまどが採用されていた。うち一つは石を積ん

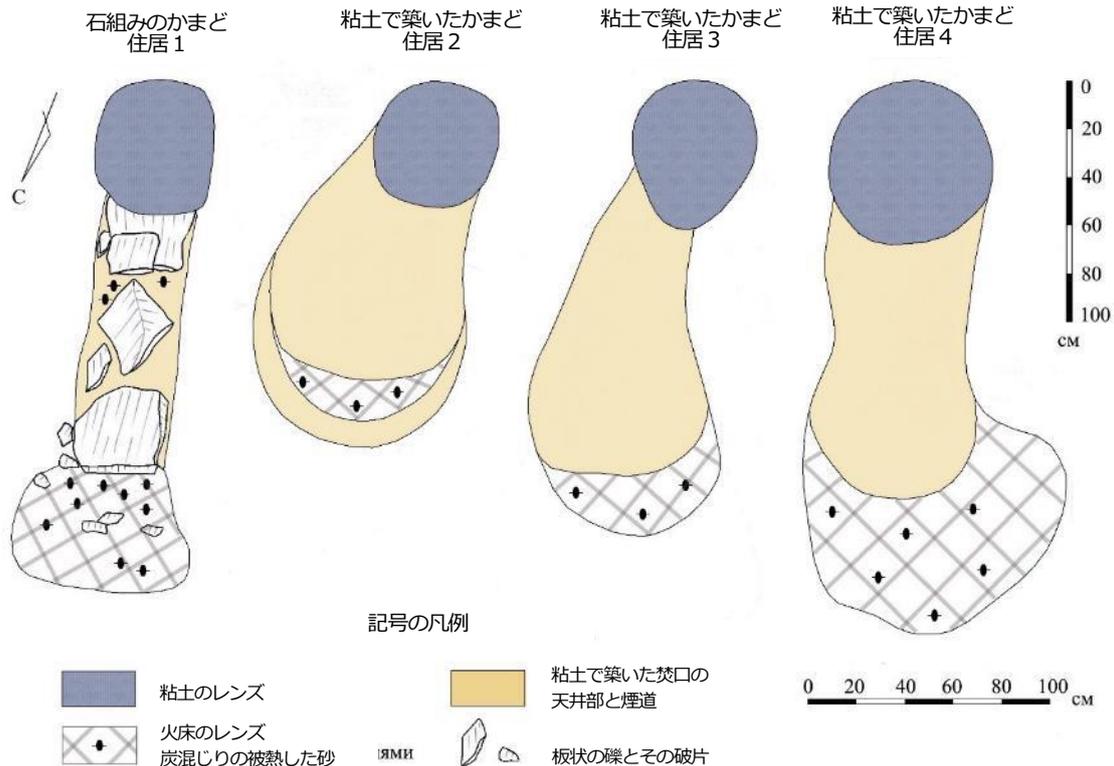


図 33 アホーツカヤ 3 集落跡 1~4 号住居におけるかまど平面図の集成。O.A.シューピナ作成

で (1 号住居の場合)、他の 3 基では粘土で築いており (2・3 及び 4 号住居の場合)、堅穴の南側の壁または隅に取り付けられ、その位置と構造の点でどれも一樣なものである (図 33)。全てのかまどを通じて目立った特徴となるのは、煙道が人為的 (意図的) に灰色の粘土のレンズで覆われていたことである。この現象の原因と意義は今のところ不明である。覆いのない炉で火を焚いた跡は 1・2 号住居では欠如しているが、3 号住居では堅穴中央に炉が認められ、4 号住居では少し南に偏って位置し、これを補うように円形または略方形の小さな変色部分が 3 か所、「可動式の」 (?) 小型の炉または火種の保持のための装置のあった位置に認められる³⁾。

住居群の詳しい年代決定は困難である。どの住居でも床面、かまど及び炉から放射性炭素年代測定のための炭化物試料が採取されたが、しかし年代測定の結果はまだ得られていない。アホーツカヤ 3 集落跡の北部で 2000 年・2001 年に発掘された住居について得られた放射性炭素年代の結果から類推して言えば、この住居群は当面 9~13 世紀のものと考えることが可能である。

かまどの構造は北海道の擦文文化期に特徴的な「カマド」のそれに近く、北海道では 9 世紀から 12~13 世紀まで使用されたことが確認されている。まさにこの擦文文化を担う人々がこうしたかまどを築く伝統をサハリンに持ち込んだものと考えられる。原アイヌとみなすことの可能な擦文文化の担い手たちの居住地が 10~12 世紀に北方へ拡大する過程で、南サハリンでは到来者と原住民の文化伝統の混合が生じたのである。

これまでのところサハリンでは 3 か所の考古遺跡でかまどをもつ住居が 15 基ほど発見されているが (文献 1・2・3)、それに伴う出土品や信頼のおける放射性炭素年代測定の例は欠如するか非常に数が限られているため、かまどを持つ住居を構築する新しい伝統がサハリン島に広がったことに関して、その年代と歴史文化的過程の性質をめぐる確たる結論に到達することはまだできない。

出典と文献

- 1 ヴァシリェフスキイ A.A.。1991 年のカルサーカフ地区・ウグリゴールスク地区における考古学的発掘調査についての報告。ユジノサハリンスク、1992 年。タイプ印刷。サハリン国立大学考古学研究室保存文書。文庫 1、目録 1 (学術報告)、第 29。
- 2 ヴァシリェフスキイ A.A.。ユジノサハリンスク国立教育大学考古学研究室第 1 調査隊のサハリン南部における 1988 年野外調査シーズンの調査についての報告(ドーリンスク地区及びカルサーカフ地区)。ユジノサハリンスク、1989 年。タイプ印刷。サハリン国立大学考古学研究室保存文書。文庫 1、目録 1 (学術報告)、第 19。
- 3 シュービナ、O.A.。サハリン南部アホーツカヤ 3 多層集落跡のかまど付き住居群 (2000・2001 年の発掘調査結果)。『サハリン博物館報』第 11 号。2004 年。179-206 ページ。

訳注

- 3) この解釈には樺太アイヌの竪穴住居で用いられた ysaxkox という火鉢様のもの(かまどから燵を採って入れ、座席の周辺に置く。山本 1943 など)についての知識が反映しているだろう。
山本祐弘 1943 『樺太アイヌの住居』相模書房